

英国病理学会派遣報告書

大阪大学大学院医学系研究科 病態病理学・病理診断科

松井 崇浩

このたび日本病理学会の日英交流事業の一環として、英国病理学会(2023 Joint Winter Meeting with the Royal Society of Medicine)に参加させて頂きました。2020年からのCOVID-19の世界的パンデミック後、最初の海外訪問ということで、緊張しながら飛行機に乗り込みましたが、1月のロンドンは大阪よりもむしろ暖かいくらいなのではないか、というような気候で、天気にも恵まれ、充実した学会となりました。今回の派遣に際しご尽力頂きました国際交流委員会委員長の都築豊徳先生をはじめ、多大なるご支援を賜りました事務局のご担当の皆様、この場を借りて御礼申し上げます。

Winter Meetingは基礎研究領域が主体の学会とのことでした。実際に発表演題の大半は、ゲノムシーケンス解析や人工知能を駆使したデータサイエンスなど、今の生命科学研究の最前線にある内容ばかりでした。組織画像や症例情報が主体となる演題はほとんど見受けられませんでした。発表者も病理医でない研究者が多く、“I’m not a pathologist, but…”という(一流誌レベルの)プレゼンテーションがとて多かったです。また、いわゆる融合領域の演題もあり、(恐らくは)物理学領域のoptical scientistによるヒト組織の解析や、アカデミア・医療分野を生業としないクリエイターによる新しいサイエンスの形のプレゼンテーションもあり、こういった多様で幅広い人材を社会で活用できていることに、西欧社会の成熟性や余裕を感じました。

私自身は、“Label-free imaging of fresh human tissue and clinical application for histopathology”という演題で、2021年の学術奨励賞で表彰いただいた内容を主体としたoral presentationを行いました。イメージング技術の実用化に向けた課題などが質問され、多くの方からgood presentationと評価して頂き、嬉しかったです。かねてより感じてはいましたが、欧米でのプレゼンテーションは、スライドファイルの作り込みからスピーチの抑揚、身振り手振りの効果的な使い方まで含めて、非常に練られた内容が多く、プレゼンに対する取り組みの重要性を再認識しました。またプレゼン後の質問やその後のフリートークでも、好意的な相互評価を絶やすことなく繰り広げており、学会という場を満足で充実した内容にする文化が広く浸透していることを感じました。

学会の合間にはロンドン市内を散策する時間を捻出でき、Westminsterの寺院や宮殿、大英博物館などを訪ねることができました。特に大英博物館はその展示物の質・量に圧倒され、大英帝国から続くイギリスの圧倒的な国力をひしひしと感じました。

今回の学会は久々の現地開催であり、多くの収穫がありました。まずサイエンスは（イギリスを含めた）世界が相手であり、研究や医療の動向も世界を意識して捉える必要があることを改めて認識しました。一方で、日本国内で行う研究であっても、質の高い仕事であれば海外からも広く賞賛されることも再確認でき、今後の私自身の研究についても熟考する機会を頂きました。

最後に、今回の貴重な機会を設けて頂きました英国ならびに日本の病理学会関係者の皆様に改めて深謝申し上げます。



学会会場はロンドン中心部の落ち着いた一角にありました。